

ある論争のかたち：黒田－滝浦論争に寄せて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/35874

ある論争のかたち——黒田・滝浦論争に寄せて

柴田 正良

一 論争の見取り図

中期ワイトゲンシュタインとフッサールの間の影響関係をめぐって、わが国において一九七五年から一九八〇年にかけて一つの論争があった。分析哲学陣営と現象学陣営（そのような二つの陣営があったとして）のそれぞれの大家であった黒田亘と滝浦静雄によるその論争は、今から振り返るとき、本格的な哲学論争というものが実現される一歩手前で終わってしまった、という点でまことに惜しむべき論争であったと私には思われる。それは、主張の異なる哲学同士がとかく簡単に馴れ合い安易に「棲み分け」てしまうわが国の状況の中で、初めて現象学と分析哲学とが「意味論」をはさんで真剣な相互批判を行なう絶好の機会であった。しかし不幸なことに、そのあるべき論争の種はついに芽を出さずに終わってしまったのである。

しかし翻ってみれば、わが国の哲学関連の論争で、生産的な結果をもたらしたものが今までにどれほどあったであろうか。われわれの精神風土がそもそも論争というものに不向きなのかどうかはともかく、ここには、西洋哲学と西洋哲学者に対するわが国の哲学者たちの基本的態度の問題が絡んでいるように思われる。つまりわれわれは、

研究対象であるテキストの読解がすでにそのテキストに対する自分なりの何らかの「再構成」であることを忘れ、研究対象があたかもその哲学者自身であるかのように感じ、彼のテキストの一字一句まで我がことのように「分かる」のが理想であると考えてしまうのである。⁽¹⁾ 回りくどくなく言えばそれは、時として哲学説の研究というよりは哲学者への帰依である。したがって西洋の哲学者同士で論争が起きれば、わが国の哲学者たちがなすのはその代理戦争であり、その水準は決して海の向こうの論争の水準を超えることはない。ましてやわれわれとは帰依の対象を異にする他の研究者がわれわれの研究対象を自らのもののように論ずるとき、われわれは自分たちの神聖な部屋が何か土足で踏み荒らされたかのように感じてしまうのである。

それゆえ、このような一般的傾向から当時最も自由であつたはずの黒田と滝浦による論争でさえもが不発に終わってしまった、ということの意味はわれわれにとつて極めて重大かつ深刻である。つまりこのことは、われわれ後学者が黒田―滝浦論争を取り上げ、そこから学ぶ、ということに二重の意義があるということである。その一つは、論争という緊張状態において現われてくる、ウィトゲンシュタインとフッサールの哲学に関する両者の理解の到達点である(二節)。われわれはどのような評価を下すにせよ、この論争を、ごく最近のわが国の哲学の到達点のある面で素直に示したものと認めなければならぬ。そして学ぶべきことのもう一つは、そもそもこの論争が実にあるものであるためにはどのようなようになされねばならなかったか、ということである(三節)。この点は、未来において論争当事者となりうるわれわれにとつての一般的教訓を含むこととならう。

黒田―滝浦論争は、黒田の「意味の生成」および「現象と文法」という論文を契機にして始まり、以後数回にわたる両者の応酬を経て、五年後の滝浦の論文「現象学とウィトゲンシュタイン」で幕を閉じると見てよいであろう。関連する論文を含めて以下に両者のやりとりを図示しよう。

黒田 亘

滝浦静雄

a 「意味の生成」、『経験と言語』第八章、一九七五、東京大学出版会

b 「現象と文法」、『哲学』第二五号、一九七五（『知識と行為』、一九八三、東京大学出版会、に

再録）

c 「フッサールとワイトゲンシュタイン——志向性と用法」、『現代思想』第五卷二号、一九七七、青土社

d 「記号を支えるもの——フッセルとワイトゲンシュタイン」、『言語』、一九七七、大修館書店（c、d 共に『言語と身体』、一九七八、岩波書店、に再録）

e 「言語と意味付与」、『思想』十月号、一九七八、岩波書店

f 「『フッセルとワイトゲンシュタイン』の周辺」、『現代思想』臨時増刊号、一九七八（『知識と行為』、一九八三、東京大学出版会、に再録）

g 『ウィトゲンシュタイン』、一九七八、平凡社

h 「フッセルとウィトゲンシュタイン」再稿、

『現代思想』第七卷二号、一九七九

i 「『論争』の終わり」、『現代思想』第七卷五

号、一九七九

j 「現象学とウィトゲンシュタイン」、講座・現

象学』第一卷第五章、一九八〇、弘文堂

二 何が争われたのか

さて、五年にわたる論争をまとめるには余りに限られた紙幅しか与えられていないので、ここでは主要な争点の
みを順に取り上げることしかできない。

a および b 論文・黒田はこれらにおいて、中期ウィトゲンシュタインの『哲学的文法』がフッサールの『論理学
研究』における現象学的意味論との対決の書であることを指摘し、現象学的意味論の克服がすなわち『論考』から
の脱却を完成させた主張する。その要点は、『論考』と『論理学研究』に共通の前提であった、記号を實在に結
び付ける精神的作用（志向性）の想定が『哲学的文法』において徹底的に排除され、言語はそれ自体で完結する
という「言語の自律性」テーゼが確立された、というものである。このことを示す黒田の論点は二つある。第一は
『哲学的文法』において、直示的定義が記号と實在を結合する規則ではなく、身振り記号を言葉記号に翻訳する規

則として捉えられていること、第二は、期待や恐れといった体験・行動を本来の意味での志向的なものとなすのが志向作用ではなく、当の期待や恐れを表明する言語表現であるとされていることである。なおここでわれわれは、黒田がb論文の冒頭でフッサールの意味論を独自の視点から批判していることを見逃してはならない。

c 論文…以上に対しての滝浦の対応は主に次の二つの主張からなる。それはまず、ワイトゲンシュタインとフッサールとの交渉関係の事実を証拠立てる決定的資料が存在しないこと、むしろリースやスピゲルバークの言う状況証拠や、またヴァイスマンとの対話の記録などは両者の影響関係がかなり希薄であることを示唆している、ということである。第二の主張は、ワイトゲンシュタインの言う志向性はフッサールの志向性とは厳密には別物であること、特にフッサールの志向性概念はワイトゲンシュタインの言う「志向性」や「意図」の背後にあつて「一般に意識の働きを生気づけるもつと根本的な働き」なのであるから、一方による他方の批判は成立しない、というものである。さらに滝浦は、ワイトゲンシュタインの自己批判はフッサールとの対決ではなく別の観点(例えばフレドゲとの関係)から解釈すべきことを指摘した後で、注目すべきことに、弱い形でワイトゲンシュタイン批判を展開する。つまり、言語規則や用法に訴えても結局は実際の使用を離れては記号は何ものでもなく、この「用法」と「使用」の架橋を果たすものこそフッサールの言う志向性の働きなのだ、と。

f 論文…黒田の反論の骨子は、両者の影響関係の有無を決定する最終根拠は両者のテクスト以外にはないという点にある。このような証拠として黒田は、両者の用語上の一致(『論考』と『論理学研究』における「(要素命題に対応する)事態 Sachverhalt」と「(分子命題に対応する)事況 Sachlage」の対概念)や、『哲学的考察』における「文法」としての現象学概念とフッサール現象学における「純粹文法」の考えとの合致を指摘する。さらに黒田は、滝浦が先に挙げたヴァイスマンとの対話は、むしろフッサールの言う志向的關係にはつきりと狙いを定めたものであると主張する。また「志向性」と「意図」を並列して論ずる『哲学的考察』二一節に關しても、そこで「志

向」とはフッサールの言う「意味志向」のことであり、また「意図」はフレーゲに由来する（語の指示に関する）「意図」のことであるから、ウィトゲンシュタインの批判は彼ら二者に共通する見解に向けられていたのだと論ずる。

h 論文・滝浦は再度、テキストにおいても状況証拠においても両者の強い影響関係は認められないと反論する。要点は、『論理学研究』において「事態」と「事況」は実際に区別なく用いられているということ、またウィトゲンシュタインの著作における「装置が果たすべき意図」とか「装置の志向」といった表現はあくまでフッサールの志向性概念とはなじまないということである。また滝浦は、ウィトゲンシュタインの現象学がフッサールの現象学と同一のものではないことを示す状況証拠として、一九三〇年代に氾濫した様々な「現象学」の存在を指摘し、さらに「論理的文法」や「私的言語」などに関してほろろジャニク&トウルミン（ウィトゲンシュタインのウィーン）の主張する、リヒテンベルクからの影響こそ考慮すべきだと論ずる。

i 論文・黒田は「事態」と「事況」に関して反論する。フッサールの意味論では命題に対応する意味と事態は独立ではないはずだから、「 $\forall p$ 」と「 $p \wedge q$ 」という二命題に関してその意味は異なるが判断の対象は同一であるとフッサールが言うとき、その対象とはそれぞれの要素的「事態」ではなく「 $\forall p \vee \exists p \wedge q$ 」という分子命題に対応する「事況」である他はなく、『論考』はこの区別を批判的に継承したのだ、と。さらに黒田は、滝浦の反論では「意図」が「志向」の一種ではなくなる、と主張する。また、滝浦説はウィトゲンシュタインの言う「志向」をそれだけで自立できない「像」・「命題基」と解釈し、それを活性化させるフッサールの「志向」を要求することによって、ウィトゲンシュタインの意味論を現象学的意味論に吸収させようとする、と。

j 論文・滝浦は、フッサールが「事態」と「事況」とを術語的にはつきり区別するのは後の『経験と判断』においてであり、しかもその区別は黒田説と異なり、「述定的判断」と「前述定的判断」に対応すると反論する。また

滝浦は、ウィトゲンシュタインの「現象学」（一次的言語）から「文法」への焦点の移動は、現象学との決別ではなく、日常言語の捉え方に対する自己批判を意味するにすぎず、フッサールの言う「志向的関係」が唯一話題となったヴァイスマンとの対話においてさえ、ウィトゲンシュタインの念頭にあったのは黒田の言うような「直示定義論」による「現象学的意味論の批判」ではなく、「内的関係」と「外的関係」に関するウィトゲンシュタイン自身の「構文法」の問題であつたと主張する。最後に滝浦は、志向は規則に還元できないという論点から、言語の自律性は規則の自律性としてではなく、むしろメルロー・ポンティの言うように言語行為（パロール）の自律性として捉えるべきであろうと示唆する。

三 何が争われるべきであつたか

前節での論争の要約はもちろん完全なものではない。しかし両者の基本主張、つまりウィトゲンシュタインは「哲学的文法」において伝記的事実として、フッサールの現象学的意味論を批判の主題として取り上げ、それを乗り越えた（と考えた）という黒田の論点と、そのような事実とはなかつたという滝浦の論点を知ってしまったえば、実は論争の展開の克明な追跡は不要なのである。なぜならどれほど逆説的に聞こえようと、哲学者の伝記に類するそのような争点は、哲学の論争としては余り大した意味をもたないからである。もちろんウィトゲンシュタインとフッサールに関する両者の貴重な知見も随所に見られるが、しかしそれらは論争の本筋とは余り関係がない。事実、論争の基本軸は、ウィトゲンシュタインとフッサールのテクストのごく一部をそのような事実関係の有無とどこまで整合的に解釈できるか、という水準に設定されたのであり、ウィトゲンシュタインとフッサールの哲学そのものの妥当性はほとんど問われなかつた。したがって残念ながら、黒田と滝浦はそのもてる力を実りなき苦役に浪費した、と

言わねばならない。では、本当は何が争われるべきであつたのか。

まず第一に黒田が、ワイトゲンシュタインの意味論は『論理学研究』における現象学的意味論を乗り越えていると本気で主張したいならば、彼は「合理的に再構成された限りでのワイトゲンシュタインの意味論」が「合理的に再構成された限りでの現象学的意味論」を乗り越えている、と主張すべきであつた。つまりワイトゲンシュタインとフッサールとの事実的な影響関係という、哲学の主張内容にとつては二次的な、たかだかワイトゲンシュタインその人やフッサールその人にもつぱら興味をもつ者にとつてのみ重要な論点からそれを切り離すべきであつた。その意味で黒田が論文で独自の視点から現象学的意味論の批判を行おうとした時、それは尊重すべき問題提起の芽を含んでいたのである。しかし黒田は、「私は現代哲学の歴史にささやかな発見を付け加えることを望んでいるのではない」(a論文、二二一頁)と言いながらも、両者の影響関係を事実として主張したいという誘惑に抗しきれなかつた。こうした事情の背後には、二人の哲学者同士の史実的關係から権利上独立した彼らの哲学同士の理論的關係、というものに徹して議論を行なうことに不慣れなわれわれの哲学解釈の伝統がある、と私は思う。したがつてもし逆に黒田が両者のそうした事実関係を主張したのであれば、彼は両者の哲学に対する評価とは独立に証拠立てられる事実を積み上げるべきであつた。この点に関し黒田は一貫して、テキスト同士の関係こそがそのような証拠であるという主張を崩さないが、しかし歴史的事実への言及を含まない理論としてのテキストの読解から引き出さうる哲学上の結論は、どこまでいつても「可能的」影響関係であつて「事実的」影響関係ではないし、またそうであつてはならないのである。しかしこのことは逆に、「再構成された哲学的主張」同士の関係を論ずる際にはありがたいことに「事実的」影響関係の立証は不必要だ、ということを意味している。

事実的影響関係の立証という点に関しては、黒田の主張は不十分であつた。それが第二の問題を容易に引き起こした、と私は思う。つまり第二に滝浦は、黒田への反論を「合理的に再構成された限りでの現象学的意味論」の擁

護、もしくは「合理的に再構成された限りでのワイトゲンシュタインの意味論」に対する批判という水準で行うべきであり、事的影響関係の有無などという論点を「さしあたりどうでもよいもの」として退けるべきであった。事実、滝浦は一度ならずこの水準に近づこうとしたことがあった。例えば再録時に削除されたc論文の冒頭部分で彼は、二人の思想家の「乗り越え」関係について、「仮にワイトゲンシュタインがフッサールによって深く影響され、その影響の一種の自己超克としてワイトゲンシュタインの哲学が形成されたということが、彼の文献の上で確証されたとしても、それが同時に、哲学の理論の上での「超克」になっているかどうかについて、ささやかな思弁をめぐらしてみたいと思う」(c論文、九五―九六頁)と述べている。しかし滝浦はその論文の冒頭で約束したことを、それ以後においても果たさなかった。彼もまた、黒田の論証の不十分さに誘い込まれるように、事実としての両者の影響関係の有無という問題にのめり込んでしまったのである。確かに、論争のあるべき水準にまで滝浦が近づこうとしたことがもう一度ある。それは彼が、b論文とj論文の最後でワイトゲンシュタインに対する批判を試みようとした時である。だがそれは批判というには余りに貧弱で展開不足の、彼の「反論」のおまけのようなものでしかなかった。しかし『論理学研究』と『哲学的文法』で見る限り、フッセルとワイトゲンシュタインの言語論がほとんど真向から対立していることは掩うべくもない」(c論文、九七頁)と考えるなら、滝浦はこのワイトゲンシュタイン批判を正面に据え、その水準から徹底的に論争を開始すべきであった。しかし残念ながら、彼が論争のこの水準に立つことはついになかったのである。それゆえ、テキスト解釈から「事実としての影響関係」へという黒田の論証構造と、哲学史上のフッサールをワイトゲンシュタインの批判的からはずそうという滝浦の基本戦略とが、それ以後の論争の水準を決定してしまった。これ以後、黒田も滝浦も「事実としての影響関係」という観点からの半ばスコラ的なテキスト解釈に没頭していくのである。

この論争からわれわれが学ぶべきことは多いが、私はその一つだけを最後に述べたいと思う。それは、哲学史へ

の興味と、理論として合理的に再構成された哲学説への興味とをわれわれは混同すべきではないということである。くだいようだが、哲学説に興味を抱いている者にとつては、哲学史上の影響関係の詮索はその哲学説を最終的に評価する上で「どうでもよい」ことである。同様に哲学史上の事実の解明にとつては、その哲学説の妥当性は最終的には「どうでもよい」ことであろう。この二つを分離するならばわれわれは、「合理的に再構成された哲学説」から全ての不純物を（もちろん自分自身の名において）取り去る権利を得たことになる。つまり、問題とする哲学説が合理的に再構成されたものであるということは、関連する哲学者のテキストの一字一句まで合理的に解釈できなくとも構わないということである。例えばこの論争においても特徴的な、「事態」と「事況」に関する果てしない解釈合戦や、またヴァイスマンに対するワイトゲンシュタインの返答（「それでもあり、それでもない Ja und nein」）に関する強引な読み込みの応酬は、「テキストの百パーセントが合理的に解釈されねばならない」という強迫観念なしには理解できない。もちろんテキストをおろそかにしてよいというわけでは断じてないが、われわれはこうした強迫観念から解放されるべきである。結局のところ、われわれがコミットするのは（コミットするとして）自分が再構成した限りでの哲学説（の恐らく一部）なのだから、関連する哲学者が実際に述べたこととその哲学説とが食い違ふのは当然であり、またそれは健全なことなのである。³なぜなら食い違ひがまったくない程にわれわれがその哲学者と一致しているとしたら、哲学説上におけるわれわれの存在価値はなきに等しいものになるだろうからである。したがってわれわれは、自分の論ずる哲学者と自分との間に生ずる自然な距離をむしろ大事にし、それを冷静に保持すべきなのである。というのも、一たび論争が起きたならば、それを決着させるのは哲学史上の人物からの引用ではなく、われわれ自身の議論でなければならぬのだから。

(1) 例えばわれわれは哲学の訓練を受ける最初の頃から、「君は何をやっていますか」というかわりに「君は誰をやっていますか」と問われるのである。

(2) この論争を「黒田—滝浦論争」と呼ぶのかそれとも逆に「滝浦—黒田論争」と呼ぶのか、ということからして何がしかの価値判断の表明になるのだそうであるが、私は単純に、論争の発端となった論文の執筆者名を先に冠することにした。

(3) 私は以前にある学会で、世界的に高名な現存の哲学者の名を挙げ「彼ならこのことに関してどう言うと思うか」と質問している人を見たことがある。彼は得意そうにこう続けた。「私はその答を直接本人から聞いて知っている」と。この一言は、質問された人にとって大いに脅威だったようである。

最後に、この論争に関連してR・ローティの「哲学史の記述法——四つのジャンル」（「連帯と自由の哲学」、富田恭彦訳、一九八八年、岩波書店）に注意の目を向けさせてくれた南山大学の横山輝雄氏に感謝の意を表明しておきたい。しかし一般的に言えば、われわれにとつての問題状況は依然として、ローティの言う「合理的再構成」と「歴史的再構成」の区別より以前の、「哲学説の再構成」と「哲学者の伝記的事実」の区別の段階にあるように思われる。